藍産業による阿波踊りの発展

徳島の城下町が発展すると、内町と新町の2つの地区に商家が集まるようになりました。その2つの川の境目に位置する新町川は、物資の輸送のための主要な水路でありました。このため、川沿いに港が誕生しました。家屋は道路と川の両方に面した入口を持つように設計されており、町民が船からの荷物の積み下ろしが容易にできるようになっていました。藍の生産は一大産業であり、藍を貯蔵する新町川沿いの蔵は町の繁栄のシンボルとなりました。

徳島の盛んな藍の交易は、地元のダンスフェスティバルを支えました。阿波踊り（徳島の旧称阿波にちなんで名付けられた）は、夏に先祖の霊を迎えるために行われる民俗舞踊の一種である盆踊りにルーツがあると思われます。また、京都や堺の街で人気のある舞踊の一種である風流踊りの影響を受けた可能性もあります。参加者は豪華な衣装を着て、楽器と一緒に賑やかな踊りを披露しました。

江戸時代(1603-1868)には、町役人の統制のもと、衣装と規律のある振り付けを組み合わせた組踊が盛んに行われていました。組踊の規制により、他にも色々な踊りが登場しました。これらの中で最も注目に値するぞめきは、パフォーマーが昼夜を問わず街頭に出て踊る騒々しいスタイルでした。現代の阿波踊りの先駆けです。